

# イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏 1905-1917

長 縄 宣 博

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授

## はじめに

ロシアとイスラーム世界は、欧米の自画像の反転として捉えられ、非難、哀れみ、嘲笑の対象となってきた。これは、西洋をまねて近代化を進め、20世紀の冷戦の中で西側に位置してきた日本人にとりわけ当てはまる問題である。イスラーム世界の構築性については、羽田正の先駆的な名著（2005年）に続き Nile Green や Cemil Aydin らがさかんに議論している。また、ロシア史に関しては1990年代以降、欧米型近代からの逸脱という見方を越えて、ロシアを世界史の中に位置付ける努力が積み重ねられてきた。拙著『イスラームのロシア』は、そうした世界認識を問い直す二つの研究潮流が交わる地平で可能となった。

## 1. なぜヴォルガ・ウラル地域か

ヨーロッパ部ロシアの東部、ヴォルガ川とウラル山脈に挟まれた地域には、イスラーム教徒（ムスリム）が少数派として散在している。この地域のムスリム社会は、16世紀半ばにロシアに征服されて以来、450年にわたりロシアと苦楽をともにしてきた。こんにちキリスト教徒が多数派を占める国でこのような国は他にない。

また、ヴォルガ・ウラル地域がロシア帝国の中核であり、植民地ではなかったことは強調されなければならない。イギリスやフランスのような「海の帝国」の場合、本国と植民地の違いは明確である。しかしとりわけ19世紀後半にロシアが日本の明治政府と同様に、中央集権化と富国強兵という大改革を押し進めると、その政策が実行される地域とそうではない地域との差が際立つようになる。ロシアの大部分のムスリム地域は19世紀によりやく併合された地域だったから、そうしたロシア人との接触の歴史の浅い地域には大改革は及ばない。これに対して、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムはそれまでにすでに300年もロシアの中に住んできたので、ロシア人と同等に扱われることになる。この地域のムスリムは、大改革で与えられた制度（とりわけ地方自治体、教育機

関、司法、兵役）を通じて、自分たちの利益を最大化すべく、ロシア政府やロシア人社会と巧みな交渉を展開するようになった。このようなことは、事実上の植民地となった中央アジアでは生じなかった。

さらに、ヴォルガ・ウラル地域はイスラーム世界の北辺に位置するので、この地域のムスリムは、地理的な制約の中でも自分たちの宗教生活を営んできた。断食の問題については拙著でも取り上げた。太陰暦のヒジュラ暦は季節と連動していないから、およそ30年周期で真夏にラマダーン月をむかえ、断食をしなければならない。通常断食は日の出から日没まで続くが、ロシアのように高緯度で、白夜さえありうる場合、ムスリムはいつ断食をやめられるのか。こうした事態に対処するために、この地域ではイスラームの法学者たちが、独特な知的営みを展開していた。

## 2. なぜ帝国最後の十年なのか

300年続いたロマノフ朝の帝国は、20世紀初頭に危機の時代を迎える。では、そもそも帝国とは何であり帝国の危機とはどのような事態なのか。帝国とは、宗教、身分、民族といった多種多様な集団に権利と義務を分配すると同時に、その諸集団を統合する理念がある国家のことである。つまり、多様性を積極的に認める余裕にこそ帝国の強さがあると言える。帝国の危機とは、多様性を受け入れるこの寛容さが弱まることにほかならない。帝国の危機は、中核となる支配民族が帝国を維持するのは割に合わない、不当だと考えるところから始まる。現代的な言い方をすれば、政府がいわば「ロシア人ファースト（ロシア人第一主義）」を掲げ始めることで、帝国の危機が始まったと考えてよい。とはいえ、帝国の危機は帝国の崩壊に直結するわけではない。むしろこの危機は、様々なレベルの権力と臣民、そして臣民の間での交渉が既存の制度の枠組みで展開することで、かなりしなやかな持続性を持っていた。支配されている諸民族は、多様性を認める帝国の統治の仕組みをできる限り自分た

ちの利益を最大化する形に改革することを要求していたのであり、帝国を壊そうとしていたのではなかった。

### 3. ムスリム公共圏の出現

拙著『イスラームのロシア』は、ヨーロッパ部ロシアの東部で少数派として生きたムスリムが、自分たちの共同体を守るために国家と交渉し、その交渉の方向をめぐって共同体内部で議論を展開した軌跡を描いた。日露戦争の最中の1905年にロシアは、革命状況に陥る。ロシア政府は、良心・言論・集会・結社の自由を保障し、国会も開設することになる。これにともない、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムは、テュルク系の言語でアラビア文字表記のタタール語を用いて新聞・雑誌を発行し、各種の集会を組織し、団体を立ち上げ、国会議員を選ん

だ。この地域のムスリムは、19世紀後半の大改革で与えられた制度を通じてすでに、ロシア政府やロシア人社会との交渉に習熟していたから、1905年革命は、彼ら／彼女たちが自分たちの公共の利益について声を上げる機会を著しく拡大したのである。

こうした状況を説明するために、拙著は公共圏という考え方を試用した。公共圏は一般に、西欧で議会制民主主義が発展する前提条件として考えられている。ロシアとイスラーム世界が西欧の自画像の反転であるならば、民主主義のないこれらの世界に公共圏などは存在してこなかったということになるだろう。しかし近年の研究は、公共圏を目的論的な指標ではなく、国家と人々をつなぐ空間という問題発見的な概念として用いることで、西洋近代に限定されない様々な時空間の人々の自発的な



図1 タタール語の新聞

左はオレンブルグで出していた『ワクト（時）』。右はカザンで出していた『真理の表明』



図2 1906年8月半ばにニジニノヴゴロドで開催された第三回全ロシア・ムスリム大会

組織活動に光を当てている。拙著が公共圏という考え方を採用したのはまず、ロシアとイスラーム世界にまつわる先入観を打破したいという期待からである。また一般的にも、外国研究とは翻訳との闘いであり、翻訳とは比較をする思考にほかならない。ロシア帝国末期にヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会に現れた言論空間と社会活動を拙著はムスリム公共圏と名付けた。そのことの成否をめぐる議論が、分野を越えて今後展開されることが期待される。

#### 4. 宗教行政、地方自治、戦争

では、ムスリム公共圏はどのような問題を軸に展開していたのか。拙著では、宗教行政、地方自治体（都市と県・郡レベル）、戦争という三つの軸を抽出した。当時のタタール語の新聞・雑誌は、これら三つの軸に整理される具体的な論点を頻繁に取り上げた。そして、これらの議論の文脈を復元し、それが当時のロシアの国家と社会にどのように位置付けられるのかを説明するために、中央政府と地方政府の公文書を利用した。私はサンクトペテルブルグ、モスクワ、カザン、ウファ、オレンブルグの公文書館で資料収集を行った。

我々はソ連からの連想でロシア帝国にも民族政策があったのだろうと思いがちだ。しかし近年では、ロシア帝国は宗教を行政上の単位にしていたことが明らかになっている。帝国のイスラーム行政を見直す議論は実に

多岐にわたる。イスラーム共同体の長をどのように任命すべきか。イスラームの学者集団（ウラマー）はどのような資格要件で聖職者として公認され、どのような権利と義務を負うべきなのか。コーランなどの宗教書の印刷の質は誰が保証するのか。どのような手続きでモスクや付属の学校を建設するか。誰がどのようにモスクや学校を維持・管理すべきか。このような議論が、都市だけでなく農村でも生じ、ウラマーだけでなく、世俗化した青年知識人、商人、国会議員なども巻き込んで、タタール語の新聞・雑誌上で展開していた。

では、少数派のムスリムと多数派のロシア人は地域社会でどのように利益を調整していたのか、そしてその交渉はムスリム社会にどのような議論を巻き起こしたのか。まず拙著はカザンの市議会を事例に、都市の商業地における休日問題を取り上げた。少数派のタタール人が金曜日に店を閉めて、ロシア人の店に買い物に行っても不都合はない。しかし、多数派のロシア人が日曜日に店を閉めると、大勢のロシア人がタタール人の店に向かうので、タタール人は大儲けする。帝政最後の十年は政府がいわば「ロシア人ファースト」を掲げたから、市議会のロシア人議員の間でも、タタール人がロシア人を犠牲に大儲けするなどのもつてのほかという論調が沸き上がる。これに対して、日曜日に店を閉めるように要求されたタタール人は、それが帝国の原則である信仰の寛容に抵触すると論陣を張る。つまりここでは、多数決による民主



図3 20世紀初頭のカザンの繁華街ポリシャーヤ・プロロームナヤ

この頃、ロシア人街にもタタール人の商店が進出した。左手に、クルバンガリー・カシャーエフというムスリムの商店が見える。



図4 1917年の2月革命後にカザンで行われた全ロシア・ムスリム女性大会の参加者

主義と少数派の保護という主張が衝突したのである。

つぎにウファ県の地方自治体（ゼムストヴォ）の事例では、国家事業としての普通義務教育の導入方法をめぐり、ゼムストヴォとムスリム社会の代表が交渉を重ねた軌跡を辿った。公的資金で小学校が立つことは、ムスリム社会にも悪い話ではない。ムスリム社会にはマクタブという伝統的に初等教育を担ってきた施設があったが、これを維持・刷新するのは大きな負担となっていたからだ。こうして論争が巻き起こる。普通義務教育の水準を満たすべく従来のマクタブの改革を続けるのか。それとも公費で立つ小学校にできる限り母語での教育や宗教科目を認めてもらい、ムスリムの父兄も学校の運営に参加できるようにゼムストヴォと交渉するか。そして、こうしたムスリム内部の論争とゼムストヴォとの交渉を通じて、民族の自立性とロシア市民であることを両立させる道も模索された。

この模索は第一次世界大戦時に頂点に達する。帝政最後の十年は戦争の時代であり、日露戦争は1905年革命を、第一次世界大戦は1917年のロシア革命を導く。ヴォルガ・ウラル地域のムスリムは、中央アジアの同信者と異なり、兵士を戦場に送った。銃後では、国家の手が回らず、個々人の力では解決できない福祉事業で、自発的な慈善団体が発達した。また、前線に動員された男性に代わって女性が社会に進出した。ロシア帝国のムスリム臣民のうち、二つの革命で最も組織力と発言力に秀でてい

たのが、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムだったのは偶然ではない。なぜなら彼らは、前線と銃後での献身に対する正当な見返りを政府に要求できたからだ。

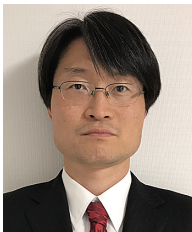
#### おわりに

帝政最後の十年に出現したムスリム公共圏は、既存の統治制度の枠内にありながらもそこから距離を置き、多彩な声が交錯する言論空間だった。それは戦時にあっては国家の動員を補助する役割も果たしたとはいえ、その活動の中から革命時に躍進する民主的な運動体も育まれた。ムスリムはロシア人との積年の雑居を通じて、利害調整の術を習得してきたが、国家が多数派を優遇し少数派に猜疑心を抱くようになると、両者の交渉の余地は著しく狭まった。現代世界でも、異質な集団への寛容がますます失われつつあるとすれば、拙著が取り上げた問題は、どこか遠くの昔話ではすまされないはずだ。

#### 謝 辞

この度は大変栄誉ある三島海雲学術賞に選ばれましたこと、大変光栄に存じます。理事長はじめ公益財団法人三島海雲記念財団関係者の方々、学術委員の先生方、また本賞にご推薦いただいた北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・センター長仙石学先生に厚く御礼申し上げます。

## 著者紹介



### 長縄 宣博 (ナガナワ ノリヒロ)

1977年 徳島県生まれ  
1999年3月 東京大学文学部卒  
2001年3月 東京大学大学院 総合文化研究科 修士課程修了  
2006年3月 東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程単位取得退学  
2007年6月 博士（学術）の学位取得  
2007年8月 北海道大学スラブ研究センター 准教授  
2017年10月 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授

中央ユーラシア近現代史。400年近くユーラシア大陸の大きな部分を占めるロシア—その多民族雑居の現場や全方位的に越境する人間の紐帯を考えることは、世界の過去・現在・未来を考えることにも等しいという確信を持って研究を進めていきます。